なるほど！ルーツ調査隊

コルク、日本初は目薬の瓶に

捨てられた洋酒用を再利用

ワインやシャンパンの栓でおなじみのコルク。ポンッという威勢の良い音で食卓を彩る。日本で初めて容器の栓として使われたのは目薬向けで、明治時代に外国人が捨てたコルク栓を拾って再利用したという。馬のひづめの保護材や自動車部品にも使われ、現在はリサイクルも広がっている。

容器の性能向上

コルクはポルトガルなどで生育するコルクガシという木の皮を加工する。断熱性や弾力性が高く、古代から建物の床材や漁業道具などに使われてきた。「17世紀後半ごろよりワイン用のガラス瓶が作られ、栓としても使われるようになりました」。そう教えてくれたのは日本ソムリエ界の第一人者、田崎真也さんだ。

日本ソムリエ協会の名誉会長も務める田崎さんによると、ガラス瓶の普及前はタルでの輸送が一般的だった。しっかりと保護したガラス瓶にコルク栓を活用することで輸送性が高まり、明治時代ごろから日本でも輸入が本格的に始まった。

そうして持ち込まれたコルクが思わぬ形で活用される。明治29年創業でコルク販売の永柳工業（東京・墨田）の丹羽浩之社長は、「実業家の岸田吟香が販売していた日本最古の液体目薬『精錡水』でコルク栓が採用された」と話す。

精錡水はガラス瓶に詰められ、瓶の口は現在の目薬よりも広い。それまで薬品などの蓋として主流だった木栓では、輸送時に漏れることがあった。

密閉性が高く、薬品を守れる素材はないか。そこで目にとまったのが、横浜の外国人居留地で船員たちが捨てた洋酒のコルク栓だった。試しに削って瓶に挿したところ、ぴったりと収まった。丹羽社長は「容器の性能を高め、普及のきっかけとなった」と分析する。

本格的に広がりを見せたのは明治時代に輸入された競馬文化がきっかけだった。西洋から競走馬を輸入する際に船室に弾力性の高いコルクの樹皮を張り、馬の足を守ったと言われる。「このコルク樹皮を砕いて再加工し、建材などに再利用していたと言われています」（丹羽社長）

旧マツダも生産

1900年代になると日本でもワインやビールなどへの活用も広がった。瓶ビールでは炭酸ガスが抜けないように蓋の裏にコルクを使った「王冠栓」が普及した。キリンビールが1912年に王冠栓を導入し、コルク産業が広がった。

意外な大企業も市場拡大に一役買った。1920年に自動車販売のマツダの前身である東洋コルク工業が広島で創業した。2代目社長の松田重次郎が機械産業への進出を決意し、現在のマツダを発展させた。同社コミュニケーション統括部の温品貴幸主幹は「コルクは季節で需要が変動した。安定経営のため機械産業へ転換したのだろう」と話す。現代でもプラグインハイブリッド車（PHV）「MX-30」の内装にコルクを使うなど、関係は深い。

第2次世界大戦でコルクガシの輸入が一時止まると、「和コルク」と呼ばれる国産品が本格製造されるように。耐熱性が高く、兵士の水筒の栓や飛行機のエンジン部品に採用された。戦後コルクガシの輸入が本格的に再開すると、自動車のエンジン部品にも使われた。

ただ、稼ぎ頭だった王冠栓は1985年ごろからプラスチック製の蓋に取って代わられた。自動車部品での採用もほぼ見られなくなり、コルク産業は徐々に縮小。丹羽さんは「最盛期と比べて企業数は10分の1以下になった」と話す。

一方で「ワインといえばコルク栓」という印象は根強い。調査会社のグローバルインフォメーションによるとワイン向けコルクの世界の市場規模は23年時点で約82億ドル（約1兆2800億円）だったが、30年には約145億ドルと推定する。

また、コルクは樹皮から製造するため樹木を伐採する必要がなく、プラスチックと違い再利用も容易だ。「環境意識の高まりで米欧ではコルク回帰の動きがある」。東京都墨田区のNPO法人「RE機構」理事長の清野眞里惠さんは話す。

同機構の室内にはコルク製の人形や額縁などがびっしりと並ぶ。全国の商業施設から出る廃コルクを回収し、学校教材やホテルのノベルティーなどとして商品化。清野さんは「1つのホテルから1日で45リットルのゴミ袋1杯分を回収できることもある」という。

最近ではロケットの先端部分にも使われるなど用途が再拡大している。捨てられていた製品を再利用する形で日本で広がったコルク。いったん市場は縮小したものの、再び注目を集めるきっかけもリサイクルだった。

（鈴木大洋）

コルクの主な歴史

～1800年代	欧州でガラス瓶の普及に合わせコルク栓が広がる
江戸末期～明治	岸田吟香が日本初の液体目薬を発売。蓋にコルクが採用される
1900年ごろ	国産ビールで蓋の裏にコルクを使った王冠栓の導入が始まる
1920年	マツダの前身の東洋コルク工業が創業
戦中	コルクガシの輸入が一時停止。瀬戸内海産の木材で国産化進む
戦後	自動車のエンジン部品などで採用される
1980年代	プラスチック製の王冠栓が導入
2000年代～	オーストラリアなどでプラスチック製の蓋が本格採用。ワイン栓でも代替が進む
現在	環境意識の高まりからコルク再利用の動きが広がる

日本初とされる液体目薬「精錡水」の瓶。国内でコルクを加工して使用した最初の例とされる

コルクとコルクガシ。約9年周期で木の皮から採取する

RE機構の拠点には廃棄コルクをリサイクルしてつくったボードや額縁などがならぶ